い。もちろん健常者であろうが障害のある人であろうが、この世に生を受けたものとしてそれは自然な欲求であり、生きている証である。特別なことではない。

著者は性の介護ボランティアを行っている人達と介護を受けている人達、外国の性介護ボランティア団体や障害者専門の性産業に関わる人達などを取材し、この本で紹介している。もちろん性には個人差があり、ここで紹介されている事は限られた時間の中で取材された事柄で、障害者の性のほんの一部であると考えたほうが良いであろう。しかしながらその内容は私に衝撃を与えるには十分であった。とりわけ私が衝撃を受けたのは性の介護ボランティアの存在である。世間の認知度はまだまだ低く、実際ボランティア活動を行っている人の数はかなり少ない。ボランティアに関わっている人達は障害者の性、快楽への欲求を当然のこととして受けとめ、その快楽を満たすためのさまざまな介護を試みている。介護内容は風俗店への付き添いから自慰行為の介助、セックス行為そのものまで様々である。今のところ世間では受け入れられない事も多いであろう。私自身もそのほとんどを受け入れることはできないと思う。どんなに素晴らしいボランティア精神であろうともそれだけで性的行為をすることには疑問を感じてしまう。性的行為により介護を受けた人間は一時的な快楽を得ることはできるであろうが、その後の虚しさも大きいのではないか?感情は時にどうしようもなく人を支配することがあるが、行為により特別な感情が芽生えた場合、ボランティアをした人はそれに対して責任をとれるのであろうか?しかし、それでも自分だけでは動くこともままならず、どんな形であれ性の快楽を得ることが生きる自信につながると感じる人にとっては必要なのであろうか?様々な葛藤が起こる。

「おんな の こ と あそびに いきたかった けっこんも したかった こども も ほしかった きょういくも うけたかった でも そう おもうことさえ ゆるされなかった。」

竹田さんの言葉が再び重く心にのしかかる。障害のある人達をただ哀れむのは何か違うと思う。でも神様は不公平だと思ってしまう。

（山口由美）

## ■自著紹介■

### あのころの日本—若き日の留学を語る—

鐘少華著
竹内実監修
泉敬史・謝志宇訳
日本僑報社 2003.11

1905年から45年といえば、日本が中国侵略を進め、敗戦ですべての目論見を瓦解させるまでの時期にあたる。本書はちょうどその時期に日本に留学していた中国人留学生19人へのインタビュー集である。彼らは敵国日本の地で、祖国が侵略される姿を目に焼き付けながら学問と向き合ったわけだが、その対し方はまちまちである。事態を知るや即座に帰国して抗日戦争に身を投じた者もあれば、上海の日本租界へ通じる橋に立てられた、「犬と中国人は立ち入るなかれ」という標識を見た上で日本に留学した者もいる。著者の鐘少華は、著名な民俗学者で実父でもある鐘敬文や、歴史学者汪向栄、作家林林といった人物との対話を通じて、彼らが「あのころの日本」で送った生活ぶりを生々しく再現している。そこにあるのは、あの時代の日中関係からは意外に思えるほどの、緊密で濃厚な民間交流の姿である。国による「外交」がどうあろうと、民による「民交」は独自の土壌を培い、不幸な時代にも豊かな実りをもたらすことができる。訳者のひとりとして本書出版に係わる事ができたのは大きな喜びである。

（外国語学部 助教授）

### 公共事業と環境問題

小林好宏著
中央経済社 2003.6

この数年、公共事業はいたって評判が悪い。一つは政治家、官庁、土建業界の癒着構造である。そこへもってきた財政赤字であるから、財政再建のため、まず目をつけられるのがこの過大な公共事業である。毎年の予算に占める公共事業は徐々に削減されだした。

公共事業の評判が悪いもう一つの理由は、高速道路建設にせよダムの建設にせよ、自然環境に悪影響を及ぼすと考えられる場合がしばしばあるからである。そのような状況のもとで、国の事業の妥当性について説明責任を果たす必要があるということから、事業評価を行うことになった。私自身、北海道開発局の事業評価にここ数年関わってきた。本書はそうした経験に基づいて公共事業の評価手法を吟味し、とくに環境要因を事業評価に組み入れるかを分析したものである。

（経営学部 教授）